

私なりの受け継ぎかた／中島麗奈さん

私が幼い頃、我が家の浴室には世界地図と国旗のポスターが貼ってあった。体を温める時間は、4つ違いの弟と母と三人のクイズの時間として過ごした。

そのおかげか小学校5年の社会の授業の時に、「スリランカの首都が分かる人？」と先生に問われ、クラスでたった一人答えられたことが自信になり、日本以外の国に興味湧き、世界の国々のことをもっと知りたいと思うようになった。

その翌年、学校で一枚のチラシが配布された。そこに書いてあった「韓国へ行きませんか？」文字は私の目に輝かしく飛び込んできた。心配性の母を説得して、参加した交流派遣は、韓国釜山の同年代の子たちとの交換派遣だった。あらかじめ決まった家庭の同年代の子同士が日本と韓国のそれぞれの家庭に交換ホームステイするプログラムだった。韓国での生活・食文化・様々な体験をする中で「同じアジア

ですごく近い国なのに、なぜこんなに文化が異なるのだらう？」と感じながらも毎日楽しく、この体験は、更に私の興味を海外へ向けさせるものとなった。中学校へ進学し、中学2年生の春、またも運命的なチラシと出会った。それは、私が住んでいる長崎市が姉妹都市であるアメリカ・セントポール市へ姉妹都市締結六十年を記念して中学生を派遣するための派遣団の募集のチラシだった。12倍の倍率を見事に突破し、派遣団に加わることができた。そして、このセントポール市への派遣は私の高校への進路を決める大きなきっかけとなった。

私たちは、派遣団として果たすべく大きな役割があった。それは、長崎原爆投下から七十年を記念して長崎市とセントポール市が共同開催する原爆展に出席することだった。原爆展では、来場者へ展示物の説明をしたり、被爆者の証言をもとに作成した紙芝居を披露したりするのが私たち被爆地から出席した中学生の役割だった。役割を無事に終え、原爆展を後にする時、原爆展の会場の周りにたくさん張り紙があった。英語で書いてある張り紙の意味を当時の私の英語力では、理解することができなかったため、引率の英語の先生へ意味を尋ねたところ、「原爆投下は戦争を終わらせるために必要なことだった。」と書かれていることを教えてもらった。「原爆投下は必要だった?!」この言葉にとても大きな衝撃を受けた。幼い頃より平和学習で学んだ原爆投下による惨状やその後の放射線による被爆者の苦しみが必要だった?!「どうして必要だったのですか?」と現地の人に問い、議論し合うほ

どの原爆投下に関する知識も深くなく、それを伝える英語力もなく、モヤモヤとイライラが混ざった何とも言えない感情だった。このセントポールの経験は、悔しさと苦いものになった。

帰国後、私はセントポールでのあの悔しさが忘れられず、自分で何か行動を起こしたいと思った。私の生まれ育った長崎では、長崎へ原爆が投下された8月9日は登校日に設定され、小学生から平和学習を行う。その環境で育った私は、どこかで「長崎の子だから原子爆弾や核兵器がどれだけ恐ろしいものかわかっている」と過信していた。そして、被爆者が高齢化しているいま、74年前に起こったあの悲劇はどのようにして後世に残されていくのだろうかという疑問も湧いてきた。私が世界でたった一つの被爆国である日本「長崎」で生まれ育っていることも運命的に感じ、原子爆弾や核兵器のこと・被害状況・被爆から復興への道のり・放射線による健康被害等、原爆投下に関係することを調べ、被爆者から直接被爆体験を聞いてみた。すると、知識が深まると同時に、原子爆弾を投下したアメリカ側のことにも興味が湧いてきた。

原子爆弾が投下された第二次世界大戦は、真珠湾攻撃がきっかけと知った。そんな折、母から以前、曾祖父と旅行をした際に、真珠湾を訪れた曾祖父が涙した話を聞いた。母の話では曾祖父は悔しかったと言っていたらしい。「悔しかった?!」曾祖父の悔しい思いは何なのかを見つけないと強くない、家族に頼み込んで中学3年生の夏に真珠湾を訪れた。そして、現地で真珠湾攻撃についてのアメリカ側の話を聞くことができた。第二次世界大戦は、真珠湾で始まり真珠湾で終わったこと。戦艦アリゾナから今も湧き出てくる油。

真珠湾で目にしたものは私に強烈な印象を与えた。兵士として第二次世界大戦に出兵していた曾祖父の涙の涙は、アメリカ側の立場で話された第二次世界大戦の説明の全てだったのであろう。戦艦ミズーリのデッキには足跡がある。それは、敵と味方で戦っていた両国の兵士たちだが、飛行機ごと体当たりして命を落した日本兵の亡骸を戦艦ミズーリのアメリカ兵達が埋葬した場所であることを示している。この話を聞いた時、私の中で何かがストンと落ちてきて、清々しい気持ちになった。そして、真珠湾での経験は、物事を双方から捉え考えろという大切なことを私に教えてくれた。

長崎に生まれ、長崎で育っていること。中学2年生でセントポールの原爆展に出席できたこと。中学3年生で真珠湾を訪れ、日本とは違う視点で第二次世界大戦を学べたこと。何よりも被爆者から直接被爆体験を聞くことができる最後の世代であること。私は平和学習部のある今の高校へと進学を決めた。

希望する高校へ入学することができ、平和学習部へ入部した。平和学習部では、私の知らなかった様々な平和活動を知ることができた。その1つに長崎市が行っている「家族交流証言者事業」というものがあった。これは、被爆者の高齢化に伴い、被爆者の証言を受け継ぐという事業である。証言には、家族や親族の証言を受け継ぐ家族証言者と血縁関係や親族関係のない被爆者の方の証言を受け継ぐ交流証言者の二通りがあり、私は、交流証言者へ応募した。

私が証言を受け継いだのは被曝当時15歳だった女性である。応募当時15歳だった私は、自分と同じ歳に被爆した女性の被爆者の話を受け継ぎたいと思った。初めて被爆体験を聞いたときのショックは忘れられない。「自分と同じこの歳でこんなに悲惨な体験をしたのか。自分が死ぬかもしれない恐怖に私は耐えれるのか。」と。何度も何度も彼女との交流を深めていくうちに、被曝当時と同じ年代の私だからこそ伝えられる何かがあると信じたいと思った。また、自分と同じような高校生や中学生にこの交流証言を聞いて欲しいという気持ちが強くなった。そして、昨年の3月、史上最年少での交流証言者認定を取得した。

高校2年生になり、今、私は交換留学生としてアメリカへいる。こちらの高校の歴史の授業で、アメリカ側の第二次世界大戦・真珠湾攻撃・原子爆弾について学んでいる。原爆投下について学んだ時、「被爆地長崎」出身であることに先生が興味

を持ってくれて、長崎の原爆投下について話したり、継承した被爆体験講話をさせてもらったりする機会を得た。日本と比較するとストレートな国民性のため「その考え方は間違ってる」と言われたり、「そんなのは嘘だ」と話を聞いてもらえなかったりすることもあった。正直その反応は辛いが、私はそれでも良いと思っている。私が被爆継承をする意味は、核兵器の恐ろしさを知ってもらうためである。私の話を聞いて、何らかの反応を示していることできっかけとしては充分だと思っている。戦争の責任がどちらにあるのかという問題は今の時代の議論ではない。被爆の実相を伝え、そこに起きたことを自分の大切な人だと置き換えて欲しい。そして、今、隣にいる知らない人は誰かの大切な人であることを忘れず、隣人に少しの思いやりを持って欲しいと思っている。これから、被爆者は更に高齢化し、それに伴い今は82歳の平均年齢も高齢化していくことになる。そして、被爆者が誰もいない、そんな世代が近くまで迫ってきている。私自身、被曝四世のため、私の家族には被爆者は一人もいない。4歳の頃に亡くなった曾祖母が被爆者だったが、幼すぎて曾祖母の記憶も少ししかない。

釜山がきっかけとなり、セントポールは私に自分の未熟さを痛感させ、大きな影響を与えた。

真珠湾は物事を双方から捉え、本質はなんであるかを見極める力が必要であると私を気づかせてくれた。そして、今の私がいる。

我が家の日本の家のトイレには相田みつを氏の日めくりが掛けてある。その中に「うまれかわり死にかわり永遠の過去のいのちを受けついでいま自分の番を生きているそれがあなたのいのちですそれがわたしのいのちです」という詩がある。平和活動に興味がなかった時は、気にも留めなかった詩が1ヶ月に1度気になるようになった。「永遠の過去のいのちを受けついで」生きている私ができること……。

将来、私はAnnoyanceになりたい。長崎で生まれ育った私だから発信できる原爆投下の実相。核兵器廃絶に留まらず「平和」が解決してくれよう貧困・教育・自然環境・社会環境などの問題にも興味があり、今後、視野を広めていきたいと思う。世界には、まだまだ諸問題により自分達からは問題で発信できない人たちがいると思う。そんな人たちの元へ足を運び、一緒に発信し抱えている問題が少しでも解決できるような活動を行っていききたいと思う。

出典：相田みつを（詩人・書家）『にんげんだもの』詩「自分の番うまれかわり」